
人間不信と数字の学園生活。

弥形部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間不信と数字の学園生活。

【Nコード】

N4167BA

【作者名】

弥形部

【あらすじ】

世界中の人間が信用できない人間不信と、個性が強い数字の擬人化達が軸となったお話。

プロローグ

誰かと関わる事ほど面倒な事はない。

気を遣ってでしか付き合えないような関係なら、無いほうがマシなのは明らかなことだ。

毎度毎度気を遣って過ごす日々。楽しいか？それ。

友達とかいなくなたって生きてけるんだ。だって俺は今此処に存在してるじゃないか。それが何よりの証拠だ。

だから俺は友達を欲しいと思わない。勿論恋人もだ。

言っておくが、友達が『できない』わけじゃないぞ。『つくらない』んだ。

小、中と友達が全くいなかったが、つくらなかつただけだ。

それに、他の奴等は熱中するものが普通すぎる。

部活？普通すぎる。

勉強？普通すぎる。

そんな学生的なものは普通すぎる。

奴等はアニメの存在を軽く見すぎているんだ。日本の文化と言われている物だ。素晴らしい文化だ。

何より、二次元は俺を裏切らない。女の容姿も最高だし、殆どが純粹で優しい、裏表のない性格をしている。

裏表が無く性格が良い奴なんて、この現実にとのくらいしかないないと思っっている。そんなのめったにいないだろ。

少なくとも、俺が会った中ではそんな奴いなかったね。

どいつもこいつも下心を持っていた。何か見返りを求めて動いていた。上っ面では『友達』だの『親友』だのとほざいて、本心は『利

用する道具』だとしか思っでないんだ。
利用価値が無ければ切り捨て、いとも簡単に裏切る。そんなものが友達と言えるのか。
そんなのが『友達』だなんて言うならば、俺は一生友達が欲しいとは思わない。

俺は幸いな事に、誰にも『利用される道具』にされなかったがな。

…いや、俺は、

「利用価値がないだけかもな」
自嘲的に、そう呟いた。

朝から金切り声や怒鳴り声を上げる親を横目に見て、出かける準備をする。

ネクタイを締め、鞆を持って。

『いつてきます』も言わずに、俺は外に出た。

今日は高校の入学式。全寮制の男子校に行くことになった。

そこに行くという事は、親が決めた。

確か、『女と付き合ったりなんかしたら、勉強に支障が出る』とか言ってたっけな。

付き合ったりなんかしないさ。付き合ったらロクな事が無いって事ぐらい、あんたら親から十二分に学んでるよ。

それに全寮制の所に入れたのは、きっと俺が邪魔だからだろうな。別に悲しくなんてない。ずっとそうだったから。

周りを見ると、俺と同じ年ぐらいの高校生が希望に満ちた顔で歩いている。まったく、おめでたいよ。

もう過ぎ去った過去にも、きつとこれから来る未来にも、希望はない。

世界も、人も、変わりはない。

だから俺は、一生この世界に希望を持たない。

一生、信用したりしない。

第一話

「まずいな。非常にまずいぞ」
色々な事を考えながら歩いていたら、あるところか道に迷ってしまった。

余裕を持って出たからとはいっても、あまりぐずぐずしていると流石に遅刻してしまう。

内心冷や汗を掻きながら、辺りをキョロキョロと見渡す。

焦っている事もあるのだろうけど、本当に何処だかわからない。

運悪く、歩いてる人も店らしきものも全く無い。

くそ、こんな事になると最初からわかっていたら地図でも書いておいたのにと、うなだれる。

今更こんな事思っても仕方がない。

若干涙目になって、空を仰いだ。

完全に曇っていて、大雨でも降りそうな俺の心とは真逆に、空は雲一つない晴天だ。

それがあまりにも無情に思えて、遂に涙が頬を伝った。

「くそお…、空まで俺を馬鹿にするか…！」

我ながら子供だとは思うが、流れ出した涙はなかなか止まらない。

道に迷った事も、今こうして泣いている事も、全部恥ずかしいやら悔しいやらで、涙が止まらないのだ。

こんな事していても、幼子じゃないから誰も助けてくれはしない。

でもどうしたらいいのかわからない。

自分の愚かさが身に沁みた気がした。

涙を止めるのに必死だったから、背後から近づいてくる足音に気づかなかった。

いきなり背後から肩を指でトントン、と叩かれた。

「っ!？」

びっくりして勢いよく振り返ると、すぐ近くに男の人の顔があり、益々びっくりして思わず後ろに飛び退いてしまった。そしたらまた近づいてきて顔を覗きこんで来た。

「だっ、だだだだだだ誰ですか!！」

「……………」

無言か。無言つてなんだよと心の中でつつこむ。それにも腹が立ったが、体を屈めて顔を覗き込んでくるのにも腹が立った。どうせ俺はチビだよ!

…腹は立つ、が。

相手の顔をよく見ると、整った顔立ちをしていて、所謂いわゆるイケメンの部類に入る。

赤みのかかったふわふわとした癖毛、そして何より吸い込まれそうなワインレッドの瞳に目を惹かれる。

顔立ちからすると、推測18ぐらいだろうか。大人の色気というか、そういうのが漂っている気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167ba/>

人間不信と数字の学園生活。

2012年1月11日01時12分発行